嵐雪句集　下

へ　5
4662
2

三條之集姉之部

初秋

林風の分うてこそ纒すらん

はやくも木の葉をちらし吹の節

海外乃世堂いく門めぐりの縁

閑居

庵にも月をさし露るふかり露の葛

昭和十六年一月十一日寄贈
尼野貴英氏

門 へ5
號 4662
巻 2

歯の何しれぬ色菖の葉ぬけし表

宗祇之廟

石塔となてゝも体むし一葉かな

市中

盆とても秋なき門乃燈籠かな

七夕

さら秋やめりかさなる色の川

契合に家妹かさんし　待如亭

隔し高尾賛　中にも紅ひの名こそ人

大伽藍造営あしくしらずの

と白きくおちと結まらん吾士

華皮相の眉を交ゆ山川とも

おもなるとし空の雨も

たゝく後へさわとあり

上野しよそ尾楽付らん混河

欲気のけろことと浮や星使

名月の松にいちそん清かりし

七夕を儀と思ふかうき世哉

七夕や加茂川こゝら牛車

防鴨河使

書越や人目清みの河清し

境の葉に小さはくとしく

義や耳にひと秋よし原しの門

世渡りえや隅田川ハ原の橋柱

さもあるもしるれ句を清ふ丈の川

飛る井あんなとの滝諭ハ世の

帆の立むくに此田夫いなかの

物に風流さへ見る所有りし

見る事あるよ

枯れらのうし縁を祝く立をあゝ

薄

のみかけまいりそし

磯際中の梅しさく旅庵の折
もよは児僧子つまあくさけれは
品川へ二里此住やむすま寿
那きの舟
おもしろく冨士にはしかふ菊野也
此の秋草に咲あく那くる哉
盃のてん底を切鏡
一つ子を探る

洸
潜 ゆくらせく色くはこゐに花の露
虫
幸よくし
老然や極あるらん盛りくす
蓑虫のあるきしはもよ草の菴　芭蕉翁
此すゆきく
何もなきも都し猫らしくかし蛍かな

茶碗銘

黒茶碗あり花の顔たちよく
く湯まて雪ふりはやしく黒し
拝待か見やとかさくさ高取焼
鼻をとつく川さ江松のしつまり
苑らくの布しるてあるへし

撿校　貧僧　大黒　小く録
たらの子　黒子○　小雪庵

三代目をけんこうふの堂して
人を枕かふきさ味あれ秘して
あはれく後を
松林しのゐんともはる黒茶碗
庵奥本香あしの尚を語し
地獄免らかとつかへと何か熱し
出色の混化蝶情の類黒きを好み
書るゝ事

山の作人餘鬼に似たるよきさしくす

宗旅

冬の葉を抜いありけば露の玉

十歳ばかりなる童の君侍りしに

駒売りの春の霜や末乃露

うすい権現にて

いなつまにきつしかる紀よの月　さしやまか

鷄汀

まぶ夜は白きひや菓鶏る

味噌くさき老の喰ひ合ゐて鷄汀ト

鷄汀も露の色さぬ蝶の卵

西氏

折ひとつとも何ふる西氏なし

其悼

尸の枯掛かる家のかげて物書く

蓮の花豊くあるは是なる女の尸かな

朝夕にとふらふ
蓮の露れ光るとしいかにぬれ

同一周忌

まてしはしらり廻りて一周忌
里右かなれけしおもひきるかな
鬼行のさまれとも法かき欲礼

盆會

魂棚にも露も涙もあまりけり

魂祭母尼の妻戸の音ハ何
答あときも皆我くさし魂祭
あまし棚や皆ゝ庵くるし茄子の人

同きる日

生海みり家々親のこゝろて恕
九日の六花ましかも露のおたせ
の冥途千世のつるれあそしこて
浮世一の見継あまりて様の菜

をも兇く說をむかる事もし
侍る
あとひしく揃て志わつむくへ讃
霊籠の雲千さ現れ川いの字かふ
あしも其法也とゆかえ也防
なき名のなかれとなる示八千日
ちは菩生の事こゑへ名りぬ
念のこ緣ハ秋こえへ離集し

逆縁ことなる人の命まつ侍り
きるも役者荒るる月照と石の
塔婆子形入歩りあるましき
をとある事もわりかくれたるは
くもれはおほ見侍りもれと
言とよく似たる事那墓と奈ゆ
松ハ続西法の火
燈を焼く火のたくしと乞杜の飛

大文字の句を書き見へられし
雲のうち鉾の相もなし
山の端を雲ても見えぬや大文字
お撲
角力とり並ぶや姥のかり錦
小者を関へよつばかり負けりとし
鳴東の私もきるや藍畠
浪りすも貴くに十九賜の上鏈

蘭鮑同肆
盗まるゝ葉やもゝ倉乃蓑の下
秋暮
立まくらし鍬歩や秋のくれ
あまりしく昔面くらす状の暮
寂しく起て又寂しく見ても秋の暮
雄の声石山寺乃鐘光をば
定家

舟炙(アブ)ると海風の秋乃夕部

草誓上人ゝ岩室

慈乃かゝりてらありかゝの庵

江之嶋

目ちと越世海士の娘なる也釣あれし

江の嶋の穴といふあるや秋の夢

露　園の縁全る梅さまて

絵る日の将みけて雪の下れ

やとりて伝り錬楽の笛子

取りしられぬ條ひハ郭労

の東の百岩へく千楽人

多る故しく博ゝあり社僧

まても似しく岩月むきはる鐘の

ゆきみ巌定なるけ階下

蓬へつまて松の風も哀を

しとめぬ

烏帽子さへ白き衣も皆小田の人

月

名月や柳の枝を空へ吹く

名月や蜩遠ゆく水のうへ

舩泊

銭矢立定めし三五よふ夜を

仕舎岨の松が枝よふの月

まて定めし松をし書けりの月

西折新茸さし戸加かをれ

して菊取の猿精をする一宿

名月に蜂も出るは花楢の邸

咲けりや芒はつ笹血翻して落る葉と鰒

海も山も皆うつくしの月

清涼寺裏の門はたたきつく

つきこがれ出るや月の

新樹や内侍所乃株の草

若葉や歌人の髭のなきがらにて
まて踏るの叱(ギヤウ)としてもみの葉
若葉は園女城見し男のかけし
む臭き脇よりあられ出の葉

ひとちの鑓かまへてあつつむ
松江の鱸鰆なれる紀ノ年
俎板をおし出じき海苔
路艶ちり紀江のしまもん

春ながしてまよそれは花のみれ
さもありてうしの若葉

花の光明照り

詠しれ涼しくすまぬりよの葉
若葉ては絶景る欲のひすみ

詞書あり略

早し雲よる若葉の雲とてあらきありか

鎌倉大佛

鳴月に南むきけり佛頂躰
名月やゑしろに撫る露の声
る笑ひ月見る人の見さげなり
　けふも塚の泥足洗つくしき
　欺もて月あかれぬゆへ舩を
　おくり侍るとて
新月のむかえなけり廣蟋簡
明月やふるの名のおもしろき

新米といかよりぬ月見かな
　詞書略
野に寐る牛の恩さえ秋の月
とこかしに宵月の小貝の磯の月
　信濃へ作る楽
君見よと添へにせん信濃のそば
　　　　和ぎ蕎麦

新酒

来しもじ新酒も人の醒やまず
鬼志江

さゝ訪や水村山郭酒旗の風
たゝしの樽やかやちと唱ふ左酒古
萬歳の盃に醒ざる香炉乃
八九月風やいつこの郷ゝ酒の貝
樽ゝもつ世の中ハ田も畦(アゼ)もなし
糸ふきも飴さいりける山里哉

柿 栗

ひとり楼にて柿くふ龍ハ誰
詞書を略
粉にも柿をぬる義の婢
毬栗や手にさけける法の場
秋のくれ井手の垣乃かゝまれて　舟竹
とりわく士老術はなれけり
人丸の柿の實山の宮の栗乃

かゝりふのねよの、あまりなり
と笑真しめ

極のかしより取ゝ山の中の實入ゝ

標蒔

林岡子黄蝶する日をたく、めの矢
くちすゝるお岸しかされをた枝草

菊

秋菊やかしろの頬のぬきおと

指す文る風をぬ意しりふの葉
蒼痕子のそこたえりか葉の岸
一々移りなりる○すもことそ菊の花

第九章

其一 九日

葉のおすずつゆしつほむ九日かな

其二 素堂亭にて人ゝに葉見られける作

かくしい家やよめ葉の中に重ねる葉

其三 百菊をおけるに

黄菊白菊その外の名もなく哉

其四　名所の菊

白きしれ隠者やす庵の谷

其五　菖のたけのくやいやさ芳ハ斎の
きらしえきてし菜も見る句をまま

露のまがき菊七人のあつまりの卯し

其六　琴

琴しき清る菜たうあかく離かな

其七　碁

菊咲ふぞ又碁まけし人ゆかん

其八　書

筆もとも抽（ニギル）芭蕉も称あれ菜の児

其九　盃

菊さけど蝶あそぶ遊へ絵の真皿

京よりかりの客へ詩よまてたのの

山越そするとあるし

志賀越てありし裾や菊のとし

新ろてをのけし若苑さく花疊
家の薫状ゝあまれしわさかしこも
縫の菓子を飾ハ飾ゝる胡蝶か
蝶をさし蝶を祝ふるや家の舞

淋下圓哲不遊

まし甘香子さんゝ山嫁の香路ハゝ
山嫁かるちもや菓子核ひらけ
きく尿や豆ゝ定弟子雛の魚

さればこそ笑の拍子のあまのたうか
神田祭のはやしみつ川しも嘉　蚊足
海しさへ何つまちりしや
むすひ犯大名を尻をとまつりの那

詞書略

雛つるしにもつれし雪や鳥脚四
ますけもの里を翔するしら鷺

楓林　紅葉

牛まれ嫁菓子をかくれ様の那

荘子樗木の大きさ牛をかくす
ねぶの酔さめを一かくとかや
化さしりんと放散逍遥の身を
おもはるゝなり

ちりけりも二度の床や桜紅葉
ちるゝくまいとて
落ぬも葉や地上の力なるかるゝ哉

病床に気をとる辨

思ひ丸老も此いふくちる母
襟の転うさくとし侍るが坂
隠ぶの中しゐる掬さすりかく
起り病く手を上に救し
をれちめる程二重に置て渠が
さへ宮覇いる入るに白き肉
黒き腸呼吸に連れて動揺
ゆるく眼をうくと見きる足

よ人ゝ六川ゝあらむて慈悲ある
護摩堂子ましゝ涅槃ハ王尊子
飢たり虎すらも我ひ龍と毎年
女為し誠や必死の人の為には
かいなり虎アヤく何ぎ世の
おしむとて京女竹くれ人へし
いすゝ死ましこそやまるる涙ひ
おもへく行忍へしとこそしれを

こゝろにも覚えゆれハおのれゆゝ
姿ありあへての虫子なとかゝる事
ゝは歌うたふをぬるを草のおもてし
を照日今宵の月かゝるは侍
霜の寒きにも悲しきや秋やい
きへさとも養虫子ゆかりたる鬼の
子なくはかくせあうしろく果
雨ふる業生の身にこらむ

いと拙なれ其躰の中に
質をも請て褌に潜りぬひ
兒子かなしく人乃血氣を
犯し吸ふこと蚊子の鐵牛
を嚙むよりも猶甚しき所也
羅の綾ける所を大とりの
中に袖さしりふりと飛び來
枕の角にかしこ甌をいたる

されぬさまは真如の性乃
ことなる事や摩竭なるとか
いへる魚乃大百由旬より蟭(セウ)
螟の微細なるまで行きわたり
憎愛かかる事なれしとある
見かし肉裏にも祈りける
むしめの佛の光に一遍
去ること捨まし怪るに物の化け

こゝし治りけるとかや知識の肌
寺刹まゝらして徳をおもれ
しうしいかにけるもさらへき
因縁にや挂乃究にせんもたく
父母日年の怨(アダ)へ報ふ
ともはた本しのかれさいかにいはし
ちんとかゝるいのちの鎌てり
来らくとていちもおかよふ寓年

出家してとおもくこ見へ候
こゝもしつるにし騒ぐ所なる
くわ都はし流し渕に物語
せし人の都より手打ち絵
よるも是をも志るゝに忠て東
雲のきをもあみて白成
時々夜詠けしも此
何さらおもの也と知し只成ののくしれし

之峰菜名之部

讃大黒

神の為色継の女房をとる恐し

十月ゝ戀

こゝもくれ嵐の巣まて吹わたる

風

東がしも楫の梢乃名残か那

お川亭すゑし

あらしはわつまきの庭哉

芭蕉翁回郷

風の吹ゆくしろつきさく哉

一葉ちりいろもちりて秋暮れ

時雨

葉を剪し時雨あまりになさん

深谷やあらさる時雨のちるあらし

山家也

いさちやのみやあとも高も消ぬてに

延喜帝

寒夜は国土の民もいかゝあらん

くらし秋のおしらぬ御衣を

ぬかせ給ひけるしきりと

脱るも御本にてを下れ衾の哉

京すゑ

ふとんきて寝たる姿や東山

足癖も抱て寝る秋傳ぞ女房丸

妙

妙りし妃の日まで忘兒果て古葉

法の筆をも写侍りし

沉著世樂無有慧心

はまえよし秋もあきぬ尖峰下

名の日なをもてしやと

実見よや秋の子いつもて壺の梅

ゐまくら川人の有奈大根

午ほ丸一字記

萱原や枯れけらひる馬の濃嚢

水斎

鈴鴨の券ふり滲る枝寒し

藻よ何を答ふるいけの句も

汀和

鴨おりしそまし歩むれ夕那

題美讃

鰭けをついく巌(イハホ)に萃るなれ

承和の花やつむ生姜味噌

十月廿五日共桃隣出武江而暨

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

上野

承和辞七日のゆふつくよの何れ

義仲ある家上よいさまつく空華

蘇し水辞うち摩す時心鏡

一塵をいまれも万象よくくれる

此師この花よおつかくえらくを

利し他を利し滅す其称

不竭今しも見ぬへともしきぬ

此下よおかしるもしるなし

十月廿二日夜

十二妹をさ夢しはりてはらくて命

四七日　題翁三物

本がしの枝も引深ゥ義しと　笠

十一月十二日　初月忌

泣中に寒菊りく耐へかね

元禄乙亥十月十二日一周忌

忌人の襟をし随めも被差ル

七回忌

霜時雨世にふれもむかしや　坐興菴

十三回

ふくの蒲団にのちる木莫ハ

帰依法　肉色の革を吟よ

鉢のやかに膳を立するあけ鬆ル

海嵐

海嵐吟ふハすも照いも秋かぶ衛達

海嵐しもなみもむかしを葉や　独往

蛎さこれしく西も一

もしいらそ石も手切ていし　暮辰

非手

かゝる舟湊の灯の雪白くなりけり

雪

門の雪印したるひのすりこ鉢

外の雪百歩の馬屋見えかゝり

虵もせよ木の兎もせよゆきの猫

初雪や福くしつね白て候

御薬地のうちをおりし侍り

きぬにぬくこそ嶽より白かの峰に

南むきのかゞとて折りな 見てさ

ゝりれも

かゝし花に積る雪は深くならひし

菓子の盆やそれも蛇見いろいろ雪たるも

沢菴の石も荒せぬやも雪のかゝ

飛ありと知るる雪の光り郎

今の雪田にし暁の月も見えすて

きくて

鍛冶の火をも挿したる笠の雪

明星[illegible]雪のうく

雪中に雪を投ぬ人あさ山水

雪ちまう寸んとんぼ簗の篠芦山

比雪ともりひよめるかんへもく

霞

武士の足かく草をくあかれ哉

都出しくまつをとらけん正霞

緒岩もる

今かし妻より見えし鉢扣

画賛

畑中よ女の静やすく拂

歳暮

山伏乃見えしにおもし師走かれ

古足袋の四十に足をふみ込ぬ

東海の子すてつるにやきもん
はき込の餅に赤子や寺の音
わたくしや注連笑ひけりしの音
さし一本轆轤まはし目カ気
人付おさまりて字世にあり日とも
さかさ庵の芭蕉もいまさ
うらしかゝりきる秋桐の葉
の一葉とくし岩こし　鉄郎

ありし枕もかへし侍らし
鉄なりしよむ人かりし古の香
慰女房
三盆子しるしるむ多年の香
古暦俤しまた人しる弟かん
黒乃んすゝ妹つくろひぬ氏の門
五十をちりの古猫の扉もとれ
ありこし花よいろいろに鼻さし

くるしみてありぬらかなし
いさ菊月の刀をのかくるゝと身へ
幸ありしらぬ事を告ぬ
うつし作ぬ猶ちりて静なりしの暮
朝の梅椿を探るにはたえてなし
足をさへ吟地せぬ事多しにしやけ
此身を家をやきまするぬるまゝ小庵の後に
つらぬまゝ眠をさへやすめての命なれば

蕎麦ちりし質殘白し余の暮
折挫のてゆ手をかるたびやその名は

辭世

東ちくは咲一葉ちる風のごとく

旹寛延三庚午正月

百萬青原 校訂

東京
書林

浅草區北東仲町
浅倉屋久兵衛